

第2回

ぼうさい探検隊 フォーラム 報告書

～地域が一体となって防災に取り組むには～



はじめに

日本損害保険協会では、防災教育活動の一環として、子どもたちがまちを探検し、防災や防犯の施設や設備を発見してマップにまとめる実践的な防災教育プログラムである「ぼうさい探検隊」活動の普及をすすめています。今回の「ぼうさい探検隊フォーラム」は、行政関係者、教育関係者や地域の防災リーダーの方々を対象に、安全で安心な地域社会に向けて、地域が一体となって防災教育に取り組むことのできる環境づくりを目指して開催しました。

このフォーラムを機会に、皆様の安全・防災に対する意識の更なる向上をお願いするとともに、今後もより一層地域の安全防災活動に取り組んでいただければ幸いです。

2006年3月

社団法人 日本損害保険協会



開 催 要 項

日 時 2006年 1月21日(土) 13:30～16:45 (13:00 開場)

会 場 東京・両国 KFCホール

主 催 社団法人 日本損害保険協会／朝日新聞社／ユネスコ／
特定非営利活動法人 日本災害救援ボランティアネットワーク

後 援 内閣府／総務省消防庁／文部科学省／警察庁／
全国都道府県教育委員会連合会／アジア防災センター／
社団法人 日本ユネスコ協会連盟

も く じ

| | |
|-------------------------|----|
| プログラム | 2 |
| 開会挨拶 | 4 |
| 来賓挨拶 | 5 |
| 第1部 ぼうさい探検隊活動の紹介 | 6 |
| 第2部 ぼうさい探検隊マップコンクール表彰式 | 8 |
| 第3部 パネルディスカッション | 11 |
| 閉会挨拶 | 22 |
| アンケート結果 | 23 |
| 日本損害保険協会の安全・防災事業の主な10項目 | 24 |
| 資料「ぼうさい探検隊」とは | 25 |

プログラム

開会

| | | |
|-------|------|------------------------------------------------|
| 13:30 | 開会挨拶 | 児玉 正之 <small>こだま ただし</small> （社団法人 日本損害保険協会会長） |
| | 来賓挨拶 | 武田 文男 氏（内閣府 大臣官房審議官） |

第1部 ぼうさい探検隊活動の紹介

スライドとビデオ映像により、ぼうさい探検隊活動の紹介と新たに作成した防災教育副教材の発表を行いました。

| | | |
|-------|-----|-----------------------|
| 13:40 | 説明者 | 宇田川 智弘（社団法人 日本損害保険協会） |
|-------|-----|-----------------------|

第2部 第2回『小学生の“ぼうさい探検隊”マップコンクール』表彰式

第2回「小学生の“ぼうさい探検隊”マップコンクール」には、全国の小学校や子ども会など219団体から782作品もの応募がありました。審査の結果、入賞した6作品の表彰と子どもたちから「喜びの声」をいただきました。

| | | |
|-------------------------|--------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|
| 14:05 | 受賞作品 | ※「」内はチーム名 |
| 文部科学大臣賞 | 福井県あわら市北潟 <small>きたがた</small> 小学校 「北潟5 BFC」 <small>ファイブ</small> | プレゼンター 文部科学省 スポーツ・青少年局体育官 戸田 芳雄 氏 |
| 防災担当大臣賞 | 大阪府高槻市立三箇 <small>さんがま</small> 牧小学校 「こう水からみんなをまもり隊」 | プレゼンター 内閣府企画官（防災担当） 災害情報調査室長 荒木 潤一郎 氏 |
| 総務省消防庁長官賞 | 埼玉県川越市立上戸 <small>うわど</small> 小学校 「上戸探検隊Aチーム」 | プレゼンター 総務省消防庁防災課長 金谷 裕弘 氏 |
| まちのぼうさいキッズ賞 （ユネスコ提供） | 福島県相馬市川原町 <small>かわらまち</small> 児童センター 「みつばち防災探検隊」 | プレゼンター 文部科学省 国際統括官付ユネスコ協力官 秋山 和男 氏 |
| 未来へのまちづくり賞 （朝日新聞社賞） | 富山県氷見市立余川 <small>よかわ</small> 小学校 「余川防災見直し隊」 | プレゼンター 朝日新聞東京本社編集局長 武内 健二 |
| ぼうさい探検隊賞 （日本損害保険協会賞） | 千葉県館山市神明町22班 「防災戦隊GO!GO!ファイブ」 | プレゼンター 日本損害保険協会会長 児玉 正之 |
| 審査員長 | 室崎 益輝 氏（独立行政法人 消防研究所理事長） | |

第3部 パネルディスカッション

防災の専門家や小学校の先生方をお招きし「学校や地域への防災教育の普及方法」について論議していただきました。

15:00

テーマ

「学校や地域への防災教育の普及方法」について

コーディネーター



藤吉 洋一郎 氏

大妻女子大学教授・NHK解説委員。昭和41年NHKに入り都市問題、気象災害、運輸・通信などを担当。河川審議会専門委員、建築審議会委員、気象審議会専門委員、総合資源エネルギー調査会臨時委員、中央防災会議専門委員などを歴任。

パネリスト



荒木 潤一郎 氏

内閣府企画官（防災担当）災害情報調査室長。災害被害を軽減する国民運動の推進など防災意識の啓発、過去の歴史的な災害からの教訓の発掘等に従事。



渥美 公秀 氏

大阪大学大学院助教授、日本災害救援ボランティアネットワーク理事。災害復興のボランティア等について実践と研究を重ねる。新潟県中越地震などの被災地救援に従事。



中野 直美 氏

千葉県我孫子市立湖北小学校教諭。平成15年度より「防災ゲーム」を学習に取り入れ、子どもたちが自ら学び進めていく防災学習を行っている。



田 和 淳 一

社団法人 日本損害保険協会職員。企業分野を中心としたリスクマネジメント業務に従事。平成16年4月から現職。

16:40 閉会挨拶 武内 健二（朝日新聞東京本社 編集局長）

16:45 閉会

2

4

5

6

8

11

22

23

24

25

開 会 挨拶

社団法人日本損害保険協会会長 児玉 正之

皆さん、こんにちは。日本損害保険協会の児玉でございます。主催者の一人として、ご挨拶を申し上げます。

さて、昨年も台風や地震、また年末には、記録的な寒波による大雪等の自然災害により、各地で多大な被害が発生しております。また、昨今、児童の皆さんが巻き込まれる大変痛ましい事件も各地で発生しております。このように多発する自然災害や凶悪な犯罪により、地域における安全や安心が脅かされている状況にあると認識しております。こうした中、私ども日本損害保険協会では、安全で安心な地域社会の実現を目指して、災害防止対策をはじめとし、犯罪防止対策、交通安全対策など、損害保険の過去の経験や、ノウハウを生かしたさまざまな事業活動を展開しております。

本日、ご紹介させていただきます「ぼうさい探検隊」は、まさにこうした活動の1つとして、取り組んでいるものです。「ぼうさい探検隊」は、お子さんたちが楽しみながらまちを探検し、地域の皆さんとの触れ合いを通じて、みずからの目で防災や防犯に関するさまざまな設備や施設を発見することで、防災意識と地域への関心を高めていただく実践的な防災教育プログラムです。

私も、この「ぼうさい探検隊」に実際に参加をさせていただく機会がございましたが、お子さんたちは、とても楽しくうれしそうでした。お子さんたちは、まちを歩きながら、消火栓や防火水槽などの防災施設を発見したり、ご同行いただいた町内会長さんから防災施設の使い方を教えてもらったりしました。また、地域の消防署や交番、スーパーなどを訪問して、仕事の内容や日々の取り組みをインタビューするなど、防災や防犯に

関することを一生懸命学んでいました。私自身がこの活動を体験してみて、「ぼうさい探検隊」というプログラムは、お子さんたちの防災意識の向上に寄与するばかりでなく、地域の皆さまと触れ合い、コミュニケーションを促進させるとともに、お子さんたちが自分の住んでいるまちを再認識し、そして住んでいる地域をより好きになってくれたのではないかな、と実感しました。

本日のフォーラムは、こうした「ぼうさい探検隊」の持っているすばらしい点を皆さまに知っていただき、地域で実践していただくために開催いたしました。本日のフォーラムは3部構成で進めさせていただきます。

第1部では、「ぼうさい探検隊」とはどのような活動かについて、この活動を広めるための当協会の取り組みをご紹介させていただきます。第2部はマップコンクールの表彰式でございます。お子さんたちが、一生懸命つくった防災マップ、そしてそれを作成したお子さんたちの声をお届けしたいと思います。そして第3部パネルディスカッションでは、学校や地域への防災教育

の普及をテーマに、行政・学校・企業と、さまざまな立場からご論議をいただく予定でございます。

長時間ではございますが、ぜひ最後までご参加いただき、学校や地域で防災・防犯教育を行う際のヒントとしていただければ幸いです。本日のフォーラムが、安全で安心な地域社会に向けた、2006年の新しいスタートになるようご祈念を申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございます。



内閣府 大臣官房審議官 武田 文男 氏

皆さん、こんにちは。内閣府大臣官房審議官の武田でございます。第2回ぼうさい探検隊フォーラムの開催に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

さて、この冬は豪雪で、今、日本各地でいろいろなたかいが進められております。東京では少し雪が降っただけで交通の混雑や転んでけがをされる方、あるいは車の事故などでかなり混乱いたします。日本海側では4メートルに近い積雪を記録している地域もございます。大変残念なことでありますが、雪害により100人を超える方々が、雪下ろしや除排雪等の作業中に亡くなられております。そこで、政府としても豪雪対策に今、全力を挙げて取り組んでおります。

また、去年は福岡県で、一昨年は新潟県で大きな地震がございました。また、首都圏でも地震の経験をしております。さらに、台風による風水害で被害もたくさん出ております。日本はいつ、どこでも災害が起こり得るという特性を持っている状況の中、災害の経験を踏まえ、その教訓をいかに社会全体で共有していくか、そして災害の備えを充実させていくか、ということが非常に大事です。こうした国・地方公共団体をはじめとする行政による公助はもとより、子どもたちを含めた住民の方々一人一人がご自身を守っていくという自助。そして、地域のコミュニティや企業の方々、そしてボランティアの皆さんをはじめとする、みんなで助け合おうという共助。こういった、自助・共助・公助の取り組みが連携をすることによって、少しでも被害を軽減していく。このことが重要ではないかと感じております。

政府では、小泉純一郎総理大臣を会長とする中央防災会議において、「災害被害を軽減

する国民運動の推進に関する専門調査会」を設けました。現在、減災社会の実現に向けて具体的な取り組みの進め方や備えを実践する国民運動の展開に取り組んでいるところでございます。

子どもたちにとっても、台風での休校、雪による被害など、さまざまな災害にあった経験があり、災害は決して無縁な存在ではありません。特に日本では地震の回数、有感地震の回数が全世界の20%以上となっています。いつ起こってもおかしくないと言われている東海地震、あるいは

東南海・南海地震。また、東京においても首都直下地震が、近いうちに襲ってくるのではないかと懸念されています。このような中、特に次世代を担う子どもたちがたくましく生き延び、そして社会を支えていく力を備えていただくためにも、地域と子どもたちが一体となった防災の取り組みが、非常に重要になってきていると考えております。

本日のぼうさい探検隊フォーラムにおきまして、全国各地から、選りすぐられたぼうさい探検隊活動やマップに触れられることは、今後の防災の取り組みに大きく寄与するものと考えております。

申し遅れましたが、今日、それぞれの賞を受賞される探検隊の皆様方には、心よりお祝いを申し上げます。本日の表彰式、あるいは後ほど行われますパネルディスカッションなどを通じまして、ご参加の皆様方の知恵と工夫を大いに披露していただき、地域と子どもたちが一体となった防災、減災に対する取り組みの輪がより一層広がっていくことを祈念申し上げます。私のご挨拶とさせていただきます。本日は、まことにおめでとうでございます。



第1部

ぼうさい探検隊活動の紹介

スライドとビデオ映像により、ぼうさい探検隊活動の紹介と新たに作成した防災教育副教材の発表を行いました。

説明者

宇田川 智弘（社団法人日本損害保険協会）

■ ぼうさい探検隊とは

ぼうさい探検隊とは、子どもたちがグループごとに自分たちの住んでいるまちを探検して、まちにある消火栓や防火水槽、子ども110番の家などの防災や防犯に関する施設や設備を発見しマップにまとめる活動です。マップは、最後に、みんなの前で発表して振り返ります。

活動のきっかけは1995年に起きた阪神・淡路大震災です。このとき、地域防災の重要性が教訓になったのですが、地域防災力を高める上では、地域への愛着や防災意識の持続が大切であり、自然と子どものうちから防災意識が高まる仕掛けがないか、ということで生まれたプログラムです。

■ ぼうさい探検隊の効果

ぼうさい探検隊の効果については、大きく2つあります。1つは、子どもたちが楽しみながら防災を学んで、身近な危険に気づくということです。大人が堅苦しく子どもに防災を教えるということではなく、子どもたちがみずから、自主的に防災を学んで、身近な危険に気づくということが、大きなポイントです。

そして2つめは、探検を通じた地域の人々との交流を通じて、地域への愛着、関心が高まるということです。ぼうさい探検隊には、例えば学校の先生やボランティア、消防や警察、地域の人たちなど多くの人たちの協力があります。こうした地域の人たちとの交流を通じて、子どもたちも自分の住んでいるまちに関心を持って、愛着が生まれ、防災意識も高まり、さらには、地域のコミュニティも強化されることにつながります。

■ 活動を支えるスタッフ、リーダーの存在

また、もう一つこの活動を支えている大きなポイントとして子どもたちと一緒に探検するスタッフやリーダーの存在があります。学生やボランティア、学校の先生などにリーダーをお願いしていますが、この役割がとても重要で、特に留意していただきたいポイントが4つあります。1つは、できるだけ子どもと同じ目線で一緒に楽しみながらまちを探検すること。2つめは、子どもに教え込むのではなく、できるだけ子どもの考えや発見を引き出すこと。3つめは、集団活動なのでできるだけ、グループで協力し合える雰囲気を作り出すこと。最後に、一番重要なのは、まちの中を歩くので交通事故や他人の通行の邪魔にならないように事故にはくれぐれも気をつけてしっかりサポートすることです。



■ 損保協会の取り組みについて



◆ ぼうさい探検隊リーダーの養成

損保協会では全国の大学生に呼びかけて各地で「ぼうさい探検隊リーダー養成講座」を行っています。これまでも何回か講座を実施しましたが、うれしいことに講座を受講した大学生が、その後自ら「ぼうさい探検隊」を企画し、実際に地域で実施いただくなど活動が広がってきています。

◆ 全国各地での取り組み

こうした大学生の協力のほか、全国各地の小学校や子ども会、児童館、商店会、ボーイスカウトやガールスカウトなど多くの地域団体で取り組まれています。また、消防や警察と連携しながら取り組む例もかなり増えており、まさに地域が一体となった活動が広がっています。

◆ ぼうさい探検隊マップコンクール

こうした全国の活動をもっと知っていただきたいという思いから、損保協会では、小学生を対象に「ぼうさい探検隊マップコンクール」を実施しています。2004年度から実施していますが2005年度は全国の小学校や子ども会など219団体から782作品もの応募があり、取り組みが倍増しています。先日入選作品9点が決定いたしました。どの作品もレベルが高く、素晴らしい作品なので後程ぜひご覧ください。

◆ 国連防災世界会議で発表

損保協会では2005年1月に神戸で開催された国連防災世界会議に参画し、この「ぼうさい探検隊」を国内外に発表しました。この時期は、スマトラ島沖地震による津波災害の直後だったことから、マップコンクールの入賞者が被災者を励ますために一生懸命に折った千羽鶴をユネスコに託すとともに被災者へメッセージを送りました。

◆ 海外への呼びかけ

この他海外への呼びかけとして、津波災害をテーマにした英語版の「ぼうさい探検隊CD-R」を作成し提供するとともに様々な国際会議の場などでご紹介しています。また、ユネスコや海外の防災機関のHP等にも広く掲載していただき、海外からの関心もかなり高い状況です。例えば、アメリカのエルパソでぼうさい探検隊を実施し、マップを使った授業をしていただいたり、タイのプーケットでは、スマトラ島沖地震を教訓に「ぼうさい探検隊」が実施され、マップコンクールにも応募いただきました。

◆ 防災教育副教材の作成

国内向けには、小学校の先生向けに防災教育副教材を作成しました。これは、全国の小学校で「ぼうさい探検隊」に取り組んでいただくために、20時間の授業プログラム例としてまとめたもので、作成に



当たっては、現場の先生方、防災の専門家の方からも積極的なご意見をいただきました。今後、できるだけこの副教材を全国の小学校で活用いただき、子どもたちが学習を通して、防災意識を高め、災害に負けない力をつけていただければと願っています。

2

4

5

第1部

8

11

22

23

24

25

第2部

第2回『小学生の“ぼうさい探検隊”マップコンクール』表彰式

第2回「小学生の“ぼうさい探検隊”マップコンクール」には、全国の小学校や子ども会など219団体から782作品もの応募がありました。審査の結果、入賞した6作品の表彰と子どもたちから「喜びの声」をいただきました。



■ 応募の状況

2回目を迎えた今回は、小学校のほか、子ども会、少年消防クラブ、ボーイスカウト、ガールスカウトなど、地域の団体にも対象を広げて募集したところ、全国各地219の小学校や団体から、合計782枚ものマップの応募があり、昨年度に比べて応募数が倍増しました。



■ 4つの評価基準で選考

評価基準は「テーマ性」、「ビジュアル性」、「提案性」、「教育効果性」の4つの視点で、事務局審査、予備審査、本審査と3段階の審査を経て、入選作品が決定されました。

本審査では、消防研究所の室崎益輝理事長を審査員長に、文部科学省、内閣府、総務省消防庁、ユネスコ、朝日新聞社等に審査員をお願いし、厳正な審査が行われました。



入賞校・団体への表彰

各賞の受賞校・団体は次のとおり。

※「」内はチーム名

文部科学大臣賞

防災教育に対する学習意欲が感じられ、かつ仲間との協調性が感じられる作品に与えられるもの

福井県あわら市北潟小学校

「北潟5 BFC」(5年生 11名)

プレゼンター 文部科学省スポーツ・青少年局体育官
戸田 芳雄 氏

防災担当大臣賞

子どもの視点でまちに対する提言や感想がしっかり述べられているなど、地域の防災意識の向上や防災対策に役立つ作品に与えられるもの

大阪府高槻市立三箇牧小学校

「こう水からみんなをまもり隊」(4年生 8名)

プレゼンター 内閣府企画官(防災担当)災害情報調査室長
荒木 潤一郎 氏

総務省消防庁長官賞

災害時の避難場所、防災施設や設備についてしっかり調べてまとめているなど、地域住民の防災対策に役立つ作品に与えられるもの

埼玉県川越市立上戸小学校

「上戸探検隊Aチーム」(5年生 11名)

プレゼンター 総務省消防庁防災課長
金谷 裕弘 氏

まちのぼうさいキッズ賞(ユネスコ提供)

ユネスコから特別に贈られるもので、地域の情報を細かく取材し、子どもたちによる独自の提案が見られる作品に与えられるもの

福島県相馬市川原町児童センター

「みつばち防災探検隊」(2、3年生 10名)

プレゼンター 文部科学省国際統括官付ユネスコ協力官
秋山 和男 氏

未来へのまちづくり賞(朝日新聞社賞)

地域の特色や防災に関する情報が第三者にもわかりやすく表現されている作品に与えられるもの

富山県氷見市立余川小学校

「余川防災見直し隊」(6年生 12名)

プレゼンター 朝日新聞東京本社編集局長
武内 健二

ぼうさい探検隊賞(日本損害保険協会賞)

地域や人々とのつながり、安全・安心への意識の高まりが感じられる作品に与えられるもの

千葉県館山市 神明町22班

「防災戦隊GO!GO!ファイブ」(3、5、6年生 5名)

プレゼンター 日本損害保険協会会長
児玉 正之

～入選を聞いて～

クラス全員で力を合わせて、がんばって作ったぼうさい探検隊マップが、文部科学大臣賞を受賞したと聞いて、びっくりしました。本当にうれしいです。

探検して北潟の防災についていろいろなことがわかりました。問題点は、これから地域の人にも知らせていきたいと思っています。(佐孝 拓希さん)



たくさんの応募の中から受賞したと聞いてびっくりしました。学年みんなで活動したことをまとめて、私達8人がマップにしました。活動してわかったことは、「みんなを守るには、まず自分の命を大事にする」ということです。今まで以上に「災害からみんなを守りたい」という気持ちになりました。(小畑明 日香さん)



みんなで入賞を喜びました。地震について調べていて、洪水の時、ぼくたちの学校がひなん場所ではないことを知りました。地震の時と洪水の時、上戸地区の人々のひなん場所が違うことを知らせたいと思いマップを作成しました。(大川 雄也さん)



私たちが作ったマップが入賞したと聞いて嬉しくなりました。まちを歩いたり、市役所で質問したり大変だったけどいろいろなことがわかり良い思い出になりました。これからもがんばります。(山田 早也佳さん)



受賞を聞いてとても嬉しかったです。大変だったけど、6年生の全員が協力して一生けん命防災マップを作ってよかったです。また、私たちの作った防火チェックカードが地域の人たちに役立てばよいと思います。(北山 華澄さん)



5人で協力して作ったマップだったので入選したと聞いた時は、とてもうれしかったです。これからは、ぼくたちが防災について調べたことを地域で活用していきたいです。(戸高 京佑さん)



2

4

5

6

第2部

11

22

23

24

25

審査員特別賞

三重県鳥羽市 安楽島子ども会
安楽島キッズ探検隊(3、4、5年生 9名)

防波堤や壁の大きさ、実際の津波の高さなどを効果的に表現している点などが評価されました。

徳島県海南町立 浅川小学校
浅川ブルースカイチーム(5年生 3名)

テーマを津波に絞っており、調べ物を一生懸命に行ったことが見ている側に伝わってくる点などが評価されました。

日本ボーイスカウト高知県連盟 高知第13団
ボーイスカウト高知13団(1、3、4年生 5名)

津波による震災被害に対してのリアリティを感じさせ、地域にも役立つ作品である点などが評価されました。

総評



第2回「小学生の“ぼうさい探検隊”マップコンクール」に入賞された皆さん、おめでとうございます。それに加えて、参加された800近い応募作品の皆さんにも心からお礼を申し上げたいと思います。

第2回のコンクールでは、3つの大きな広がりが生まれたように思います。

1つ目は、「参加者の広がり」です。昨年の倍以上の仲間がこのコンクールに応募してくれました。

2つ目は、「工夫の広がり」です。それぞれの地域の危険性をあらわした地図や資料を集めてきたり、あるいは昔からの災害の歴史を調べたり、いろいろな努力と工夫で豊かな内容になったことが指摘できると思います。

3つ目は「テーマの広がり」です。地震や津波のマップだけではなく、犯罪や交通の危険性についてのマップもたくさん出品されました。そういう意味で広く安全の問題を考える土台ができたように思います。

今回のコンクールは前にも増して非常に大きく発展をしたと私は思っています。やはり子どもが中心にならなければ日本の社会、都市は安全にならないということを痛感しました。

ひとりでも多くの子どもたちが日本の防災の担い手になることを期待します。

審査員長 独立行政法人 消防研究所理事長
室崎 益輝

第3部

パネルディスカッション

防災の専門家や小学校の先生方をお招きし「学校や地域への防災教育の普及方法」について論議していただきました。

「学校や地域への防災教育の普及方法」について



コーディネーター

藤吉 洋一郎 氏



大妻女子大学教授・NHK解説委員

パネリスト

荒木 潤一郎 氏

内閣府企画官(防災担当)
災害情報調査室長



渥美 公秀 氏

大阪大学大学院助教授
日本災害救援
ボランティアネットワーク理事



中野 直美 氏

千葉県我孫子市立
湖北小学校教諭



田和 淳一

社団法人
日本損害保険協会職員



2

4

5

6

第2部

第3部

22

23

24

25

■ 防災教育への取り組みの きっかけ・動機

【藤吉】 防災の話は非常に大事ですが、正直に言って、楽しい話ではなく、なかなか聞いてもらえないことが、長い間、我々防災に取り組んでいる人間の悩みの種でした。しかし、「ぼうさい探検隊」のように自分たちの町を自分たちで歩いて見つめ直し、防災マップをつくれれば、みんなで防災の話を共有するきっかけになるのではないかと。そのような試みが着実に始まりつつあると感じています。パネリストの皆様は、これまで防災教育に大変尽力をいただき、その普及に貢献のあった方々ですが、そもそも防災教育に携わったきっかけや動機は何でしょうか。



のは、平常時の地域での防災活動の大切さです。確かに今、藤吉さんからお話があったように、防災の話はなかなか進まないのが現状です。

楽しくもないし、明日、災害が来るわけでもありませんから。そのような現状を打破するため、日本災害救援ボランティアネットワークでは「ぼうさい探検隊」のようなプログラムを開発し、また大阪大学ではコミュニケーション・デザイン・センターが設立され、防災の専門家と一般の方とのコミュニケーションの円滑化を図ろうとしています。これはどう

いうことかということ、例えば今冬は日本海側では大雪が降っていますが、積雪4メートルと言われても、あるいは降雨量が1時間当たり50ミリと言われても、一般の人にはピンとこないでしょう。それをどう伝えていったらいいかという仕掛けを考えようと。今は、そんな取り組みをしています。

■ 内閣府での取り組み

【荒木】 もちろん内閣府で仕事の一環として携わったのがきっかけですが、実際に防災担当になってから、もう一段深く考えるようになりました。現在、主に「ぼうさい探検隊」のような防災教育プログラムの作成支援をはじめ、各種の資料作成、あるいは過去、日本で起きた被災記録(時には記憶)の整理・保存作業を行っています。

■ 教え子に防災力を

【中野】 私も渥美先生と同じく、阪神・淡路大震災のときに地域防災力の重要性が強く訴えられたのがきっかけです。私の教え子たちは、彼らの今後の長い人生において、確実にと言ってもいいほど、大規模な地震等の災害に遭うでしょう。その災害に向け何をどう自分たちは備えていなければいけないのか。また災害が起きたとき、自分たちは復興に向けてどう立ち向かえばいいのか。このようなことを災害が起きる前から考えておいてもらいたい。このことを伝えるために防災教育に取り組み始めました。

■ 阪神・淡路大震災を 経験して

【渥美】 現在、私は大阪大学で教鞭をとるほか、日本災害救援ボランティアネットワークの理事も務めさせていただいています。私が防災に興味を持ったきっかけは、11年前の阪神・淡路大震災です。当時、私は神戸大学に勤めていて、あの地域に住んでいました。もちろん避難所でもいろいろと活動しました。そのときにわかった

実際、平常時から、子どもたちに持続して防災活動・学習をしてもらうためには、やはり楽しみながらやっていくものでないとだめです。そのため、防災ゲーム等々、子どもたちがみずから学んで取り組んでいけるような活動を、ここ2年間、実践しています。その詳細はまた後ほどご紹介したいと思います。

■ 保険業務から 防災の観点へ

【田和】 仕事として災害にかかわったことがきっかけです。企業人ですから、人事異動により防災部門に配属されました。その前に損害調査部門にいましたので、被災現場を見てきました。例えば、損保業界最大の保険金支払いとなった1991年の台風19号や95年の阪神・淡路大震災です。特に阪神・淡路大震災のときには、コミュニティができていた地域は、自力で復旧・復興していました。その後、企業のリスクマネジメント部門の仕事をしたときも、リスクに対して日頃からしっかりと防災計画をもち、きちんと訓練されている企業は立ち直りが早いことを実感しています。

防災教育活動の内容

■ 防災と言わない防災教育

【藤吉】 渥美先生、「ぼうさい探検隊」をはじめ、先生の活動内容を具体的にご説明願えませんか。

【渥美】 阪神・淡路大震災から11年たって、被災地域の方々が今も常に防災に気をつけているかという点必ずしもそうではありません。というのは、生活していく中で、防災以外にもいろいろやるべきことがあるからです。だから、防災に携わる場合、注意しなければならないのは、皆が皆、防災に気を配ってくれると考えるのは幻想だということです。

そのような現実を受け、最初に発想したことは、防災と言わないで防災ができるようになったらどうだろうかということでした。「ぼうさい探検隊」と「ぼうさい」という名をつけているものの、意図としては防災、防災とガミガミ言わずに防災のことをやっていただけたらいいなど。だから、「ぼうさい探検隊」では遊びの要素を大変重視しています。

「ぼうさい探検隊」以外にも、この遊びの要素を積極的に取り入れた活動を行っています。例えば、後ほどご紹介があるかと思いますが、私たちではありませんが防災ゲーム研究会の活動もありますし、私たちの仲間では「カエルキャンプ」を展開しています。「カエルキャンプ」とは、マスコットのカエルとともに我々が盆踊りなどの地域のイベントにお邪魔して、そこで、その地域の子どもたちといろいろなクイズ、ゲームあるいは人形劇などを通じて、防災行動の体験や防災知識の習得をしていただくものです。例えば的当てゲームでは、消火器に水を入れて、それでカエルを描いた的をねらいます。ここでのポイントは、水消火器は実際の消火器と同じように、あまり長く使えないことです。「消火器は何秒しか使えませんよ」といくら口で説明してもなかなか通じなかったことが、子どもたちは、このゲームで実感できることが大切なのです。



ほかにもいろいろなゲームがありますが、一見、防災と無関係に見える遊びや行事を行い、それが終わったときには、防災のことが少しわかってもらえるようなことを一生懸命やっています。

■ 湖北小での 2年間の取り組み(1) ～5年生での活動～

【藤吉】 中野先生は、実際の学校現場で防災教育を実践されていますが、その手順や内容などをご紹介いただけませんか。

【中野】 では、少し長くなりますが、私が担当した子どもたちが5年生、6年生と2年間でやってきた防災学習を紹介させていただきます。

まず本校の防災学習のポイントをまとめてお

2

4

5

6

8

第3部

22

23

24

25

きますと、防災ゲームの活用(2年間で9種類のゲーム)と子どもから地域への情報発信(「防災パンフレット」「防災新聞」の発行)、そして「ぼうさい探検隊」への参加があります。

防災学習の導入段階では、防災ゲームとして「ぼうさいDo Through 10」「ファイアーファイターゲーム」を行いました。「ぼうさいDo Through 10」では、子どもたちは、正しい初期消火の方法、また危険を周囲の人たちに伝えることの大切さを話し合いながらみずから考え、また、「ファイアーファイターゲーム」では、みずからが消防司令官になって、火災が多発する場合の現実的な対応(例:小さい火災より大き



い火災の消火が優先される)を考えることで、防災学習の大切さを感じ取ることができました。つまり、この段階で防災学習へ取り組む動機づけをしたわけです。

そして次の段階では、大規模災害とは何か、防災は何をしないといけないのかを、より具体的に知るため、防災関係機関の人たちのお話を聞いたり、防災センターでの体験学習、救急隊の指導による応急手当法の学習など、情報収集に努めました。そして、これらの活動を通じて、子どもたちは、大規模災害、特に阪神・淡路大震災のときには自助・共助・公助という考え方がとても大切だと言われたことを学びました。そして共助をしていくためには、地域の人たちにも防災について知ってもらうことが大切で、そのためには、自分たちが学んだ知識を地域の多くの人に知ってもらおうということで、「防災パンフレ

ット」にまとめ、配布しようとなったわけです。

「防災パンフレット」の内容には、応急手当法や、非常時に使える灯りづくりの方法などを盛り込み、まずは自分の家族、近所の人に配りました。そうしたところ、これがなかなかよくできていると評判になり、保護者から学校に「もっと地域に広めていけばいいのでは」と提案があり、子どもたちとも相談し、公民館にも置いてもらいました。

普通は、ここまでくれば、「ああ、子どもたちも十分学習したな」で終わってしまうのですが、自分たちが学んだことを、これからも続けていかなくてはいけないことを子どもたちに感じてもらうため、ここでまた幾つかの防災ゲームを活用しました。

それらは自分たちの習った知識を活用するゲームで、例えば危険回避をシュミレーションするゲーム「KYT(危険予知トレーニング)」、桁目の状況に合った救急手当をする「救急法すごろく」、復旧・復興に向けての協力をを行うカードゲーム「震災さばいばる」です。特にカードゲームでは、災害後の混乱した状況では、さまざまなデマ情報が乱れ飛ぶことを想定し、情報をいかにうまく整理し、正しく伝え合うことが大切か。それには自分が言いたいことを、ただの単語ではなくて、相手にわかりやすい文章として伝えなくてはいけないことを学びました。つまり、普段の生活の中でもコミュニケーション、特に言葉は大事だと気づき、次の段階につなげていくことができたのです。

■ 湖北小での2年間の取り組み(2) ～6年生での活動～

【中野】 5年生で行った子どもたちの活動を地域の方々に評価していただき、また防災教育チャレンジプランに応募して、チャレンジ校と認定されたので、引き続き6年生でも防災学習を続けていくことになりました。

先ほどもありましたが、大人たちは日々の仕事

や生活が忙しく、大事だとは知りつつも、つい防災のことは忘れがちです。そのことは子どもたちも知っています。そこで、子どもたちは継続的に地域に防災を呼びかけていくことが大切だと考え、月1回「防災新聞」を発行し、地域に配布することにしました。内容も広く読んでもらうことを優先して、肩の凝らないクイズや漫画を入れ、自分たちの下級生にも読んでもらい、防災に親んでもらおうと、楽しい紙面づくりを行っています。現在、全校児童及び保護者向けのほかにも、教職員向け、公民館向け、さらには100の自治会に配布し回覧していただくなどで、860部近く発行しています。

そして、「ぼうさい探検隊」につながる活動として「防災マップ」の作成を行いました。5年生の間に地域の防災施設・設備のある場所を学習した結果を、今、「防災マップ」にまとめています。今のところは模造紙にまとめた段階ですが、今後は、これを「防災新聞」と同様、地域に配布ということで、コンパクトなハンドブック化を計画しています。

前述のように、5年生のときに子どもたちはゲームを通じて楽しみながら防災を学びました。自分たちのこの経験を下級生にも伝え、楽しみながら防災を学んでもらうために、人形劇や「ぼうさいダック」を活用しています。お兄さん、お姉さんが教えてくれるので、教師が教えるよりも下級生も楽しく学んでいるようです。

また5年生や4年生という少し高学年生向けには、6年生の自分たちが学んだ防災知識をもう少し知ってもらおうということで、「ぼうさい駅伝」というすごろくゲームをつくりました。これは三択式の防災クイズを解きながら駒を進め、すごろくに勝った、負けたと遊びながら、自然と防災知識を身につけるものです。この問題づくりは、防災ゲーム研究会の皆さんと一緒に行いました。クイズ問題をつくることで、6年生の子どもたちは、みずからの知識を整理でき、さらに問題にワンポイント情報といって、このクイズで知ってほしいことは何かを盛り込むことで、問題づくりも楽しくなりました。もちろんクイズを解いて遊ぶ下級生も楽しく、6年生の子どもたちからは「つくる

のも楽しいし、遊ぶのも楽しい。先生、一石二鳥だね」なんて言われました。

このように私たち湖北小学校での防災学習のポイントは、子どもたちが楽しみながら、大事なことを自分たちで発見して学びとることです。そして、学習の成果を地域へ発信していったわけです。将来的には、子どもたちが成長して、防災力を持った大人として、地域の防災リーダーに育てられることを願っています。



■ 国の防災教育支援への取り組み

【藤吉】 ありがとうございます。すべての学校で、中野先生の学校のような防災学習ができれば心配はないのですが、現実はなかなかそうはいきません。その点、国として、防災教育に対して支援するために、どのような点に気がつかっていらっしゃいますか。

【荒木】 防災教育への取り組みは、今後、さらに広い分野で取り組んでいきたいと国も考えています。一昨年来、さまざまな災害が各所を襲い、また内閣府において、巨大地震などの災害予測や対策を取りまとめ中でもあり、世論や関心の高まりも見られます。そのような中で、自助・共助・公助の連携のもと、社会全体の減災のための行動を実践する国民運動という形で、社会の各界各層での減災への取り組みを大きく広めていきたいとの観点から、防災教育への支援も取り組んでいきたいと思っています。また中央防災会議でも、従来のハード的な防災対策のほか、ソフト的な対策も大きな柱として位置づけていますので、防災教育は内閣府としても強力に進めていきたいと考えています。

現在、中央防災会議の下に専門調査会を設け、基本方針を取りまとめ作業中です。今年の3月末をめどに一応の取りまとめを終え、具体

2

4

5

6

8

第3部

22

23

24

25

策は引き続き、来年度も検討していきたいと考えています。今のところ、防災意識や防災力を高めてもらうためにも災害リスクや耐震化、避難経路などの防災に関する情報を知っていただき、災害時の行動を身につけることを1つの重点課題として位置づけています。

防災教育の拡大展開

■ 防災教育の推進を阻むもの

【藤吉】 国としても、防災教育の重要性を認識しているとわかりました。しかし、実際には防災教育を進めていく上でいろいろな制約があります。その点、これまで10年近く、防災教育に取り組んできた渥美先生、何かお感じになることはありますか。



【渥美】 少し抽象的な表現で恐縮ですが、防災教育の「防災」と「教育」を狭く考え過ぎてきた面が、実は制約になっているのではないかなと思います。

例えば「防災」ということで、今日、この会場に、こうやって皆さんいら

していますが、本来、「防災」とは生活の流れの中に、ふっとあっていいものだと思います。だから、こうやって特別に集まったり、何か対策を練ること自体がまだ第1段階なのであって、「防災」をもっと生活の中に埋め込むことはできないだろうか。つまり、「防災」とはこういうものであると考えてしまうこと自体が、既に妨げになっているのではないかなと思います。

防災教育の「教育」を考える場合も同じです。「教育」というと、教師が生徒に教えることと考えがちですが、中野先生のお話にもありましたが、6年生が下級生にいろいろ教える。これも「教育」

です。さらに言うと、学校だけが防災教育を担うものではないのです。

いや、むしろ学校にまつわる諸制度自体がいろいろな制約になっていることも考えられます。例えば防災学習をするとしても学習内容が多岐にわたるので、どの科目に入れていいかわからない。そこでとりあえず総合的な学習の時間で扱っている学校がほとんどでしょうが、そうすると教える時間に制約が出てくる。制約ある時間の中で効率よく行うには、防災教育のための手引きや副教材が必要になりますが、それがまだ十分にそろっていない。このような感じで、さまざまな制約ができてくるわけです。

■ 『ぼうさい探検隊 20時間授業プログラム』の活用法

【藤吉】 なるほど。防災教育に熱心なあまり、逆に制約をつくっている面があるのかもしれないね。今、最後に出てきました副教材の件で、損保協会が作成された『ぼうさい探検隊20時間授業プログラム』は画期的な副教材ではないかと思います。田和さん、その活用法などを含め、お話しただけませんか。

【田和】 我々損保協会は、平和な家庭や地域の安全、特にその中にいる子どもたちの命を守るため、災害にどう備えていたらよいかを知り、そのために行動してもらいたいということで、「ぼうさい探検隊」を昨年度から本格的に進めてきました。このプログラムに参加していただくため、学校に説明に伺いますと、今、渥美先生からお話があったように、防災教育の大切さはわかっているが、先生たちは防災そのものを習ったことがない。その手引きや副教材がない現状では、どうやって防災を教えていいかわからないと悩まれていることがわかりました。

例えば、このような話を聞きました。ある学校で、地震が来たら、次に津波が来るかもしれないので、高いところへ逃げろと教えた。そのとき、県が

決めた避難経路を示して、こういうルートで逃げろと先生が言ったところ、ある生徒が突然泣き出したのです。なぜかという、そのルートでは、高台へ逃げるために一度、海側へ出ないといけなかったのです。それを知ったその生徒は、先生の言うことを聞いたら、津波に襲われて死んでしまうと思って泣き出したのです。その先生は、そのとき、どうやって防災を教えていいか、わからなくなっておっしゃっていました。



その後、県の防災部門が高台へのルートをつくったそうです。これは大人が気づかないことを子どもに教えてもらった一例だと思います。我々は先生方の悩みに応えるため、先程ご紹介した副教材を作成しました。これは総合的な学習の時間で「ぼうさい探検隊」を行っていただくため、1時間目に何を、2時間目は何をするというようにプログラムの進行が書いてあり、これを見てやっていただければ、最低限の進め方ができますよということで作成した教材です。「ぼうさい探検隊」は、例えばまちなに出て、防火水槽等の防災設備・施設を実際に探す活動があります。そのときには観察力が必要になりますし、防火水槽の容積を表現にするのにペットボトル何本分とするなら算数の力も養えますし、探検結果を報告するには国語の力、あるいは絵にするなら図画の力、さらにはそれをみんなの前で発表するには、日本人に一番求められるプレゼンテーション能力など、さまざまな学科に織り込める活動が一度にできます。ぜひ私どもの副教材を小学校の授業に役立てていただければと思います。

【藤吉】 制作に参加された中野先生から、何か補足はありませんか。

【中野】 田和さんがおっしゃったように、教師は防災について習ったことはないのですが、もし生徒たちに教えるなら、まずはみずからが予備知識

をつけたり、教材研究にかなりの時間を費やさなければいけません。でも、これも前に出たように学校は防災教育だけを教えるわけでもなく、ほかにもいろいろ教えたり、やるべきことがあります。つまり教師は非常に多忙なわけで、防災教育にどれだけ下調べや準備の時間を割けるか。私はかなり熱心にやりましたが、全教師に求めるわけにはいきません。

こういう現実のもと、損保協会さんの副教材は現場としては非常に助かりますし、それまで躊躇していた教師も、これを手だてに防災教育に取り組めるようになるでしょう。こうやって少しずつ防災教育が広まって、教師側の意識も変わり、教師も学びとる姿勢が防災教育を通じて身についてくるのではないかと思います。とにかく、これから先、教師側も頑張っていきたいと思います。

■「奥さま防災博士」について

【藤吉】 ありがとうございます。田和さん、損保協会がもう一つやっておられる「奥さま防災博士」についても簡単にご説明願えませんか。

【田和】 「奥さま防災博士」とは、一般主婦の方から、特に防災意識の高い人を対象に、私

2

4

5

6

8

第3部

22

23

24

25

ども損保協会が「奥さま防災博士」と認定するものです。1972年から始めていて、全国に現在約280名います。今年度から活動・組織を強化しています。活動内容は、お住まいの地域の中で、防災に関係するさまざまなボランティア活動を行うことです。例えば「ぼうさいダック」や「ぼうさい探検隊」の実施です。今日は残念ながら大雪のため中止しましたが、実施する予定だった「ぼうさい探検隊」のお手伝いとして、大学生とともに「奥さま防災博士」の方々にも来ていただいています。

女性は子どものことを一番に考えますし、地元でいろいろなネットワークをもっています。そう考えると地域の安全活動の中心は女性が担うと考えられます。

たことが大きいです。その方から、さまざまな防災ゲームをご紹介いただき、それを学校の授業で使うには、どうアレンジしたらいいかを考えたわけです。防災ゲーム研究会の方々には皆さん、ボ



ランティア精神旺盛な方ばかりですので、どの学校にも協力していただけるのではないかと思います。市民防災研究所に問い合わせただけであれば、防災ゲーム研究会とも接点ができるかと思っています。

成功事例を増やすために

■ 情報入手の成功例

【藤吉】 さて、ここからは、パネリストの皆様がやってきたような防災教育の成功事例を今後、増やすためにはどうしたらいいかを考えていきたいと思います。というのは、物事をうまく進める上では、失敗例から学ぶよりも、成功例から学んだほうがはるかに間違いないと思うからです。

まず最初に、私は個人的にもお聞きしたいなと思ったのですが、中野先生は、防災ゲームを数多く知っていらっしゃるなど、いろいろ情報をたくさん入手されていますが、それは一体どうやって入手されたのでしょうか。また、これからやろうとされる方に対して、どうすれば手際よく情報を入手できるのか、助言があればお願いします。

【中野】 実は私の夫が防災関係機関に勤めていて、防災に取り組んでいたのです、その関係で防災ゲーム研究会の方とお知り合いになれ

■ 海外でも注目される「ぼうさい探検隊」

【藤吉】 では、渥美先生から、成功例をご紹介していただきましょう。

【渥美】 成功例はたくさんあって、学校現場では、中野先生のほかにも、兵庫県の舞子高校での取り組みなど、挙げればきりがありません。また学校現場以外でも、今もお話があった防災ゲーム研究会や、私がかかわっているものでは、冒頭にご説明した「カエルキャンプ」をしながら全国を回る「カエルキャラバン」も挙げられるでしょう。そのほか、災害NPO有志が集まって、「智慧の広場」というウェブサイトに防災ツールを紹介してはどうかと提案しているとか、さまざまな事例ができてつあります。

また「ぼうさい探検隊」は海外でも注目され

始めていまして、一昨日、私はイギリスで活動発表をしたら、早速やりたいという反応が返ってきました。またアメリカ、イラン、インド、ネパール、スリランカ等々からも、やりたいという声がよく聞かれます。そこで教材集をまとめられないかと防災ゲーム研究会の矢守先生とも相談しているところです。

■ 国民運動として展開を

【藤吉】 国としては、どのようなお考えでしょうか。

【荒木】 これまで、国の対策としては、災害発生後、国や地方自治体などの公が、被災地に入っていくべき活動とか、あるいは災害発生前の予防対策ではハード的なものが多かったと思いますが、最近、ようやく将来に備えて、皆様の知恵を結集していくという考えが出てきたように感じます。防災は、これまであまり意識してこなかった人にも関係がある、つまり国民全体にかかわる問題です。先ほど、国民運動という、ややお役所的な表現をしましたが、社会の各界にある知恵をどう連携していくかという意味では、まさに国民運動ではないかと思えます。

■ むすび ～パネリストからのメッセージ～

【藤吉】 最後にパネリストの皆様から、学校あるいは地域の防災リーダーや防災教育に携わる方々への応援メッセージをお願いしたいと思います。

■ 生きていく上で必要な力を身につけて

【中野】 防災学習を進めてきて一番よかったと思うのは、子どもたちが、被災地の様子を調べたり、被災者のお話を聞いて、命はほんとうに大切なのだと実感してくれたことです。そして、

その命を守るために、自分たちは何ができるのかを真剣に考え、地域にも働きかけてくれました。そして、このような子どもたちの気持ちや行いを、地域の人たちが受けとめ、子どもたちを頼りにしてくれました。子どもたちは、頼りにされることで、自分たちが今学習していることは確実に役に立つものだと実感して、すごく自信を持てたことは、ほかの面でもいい影響を及ぼしています。

防災学習は少し難しいなど躊躇している先生方も、とりあえず積極的に取り組んでいくと、子どもたちがどんどん学びとって成長していく姿を目の当たりにできるでしょう。防災だけではなく、生きていく上で必要な力を身につけることにもなるので、ぜひ取り組んでいただきたいと思えます。

■ まずは一歩前へ出よう!

【田和】 情報には2つあると思えます。1つはインフォメーション。もう1つは、コミュニケーションです。インフォメーションは一方的な情報提供となり、シンポジウムの内容は教養講座となってしまいがちです。そうではなく、お互いが相手の言うことを理解しあうコミュニケーションが大切です。「ぼうさい探検隊」「ぼうさいダック」のようにフェース・ツー・フェースのコミュニケーションによって、むしろお互いに情報をつくりながら地域防災に役立てていく。そのようなことが大切だと思います。それが地域コミュニティづくりの第一歩になるでしょう。

最初に一歩踏み出すのは大変勇気が必要ですが、非常に重要なことです。これをやることで次々に進歩が生まれるのですから。例えば日本を代表す



2

4

5

6

8

第3部

22

23

24

25

る大企業が阪神・淡路大震災のとき、この会社の生産ラインがとまれば、日本経済は半年はだめだろうと言われたほどの会社ですが、幸い、この会社は早期に通常の実業ベースに復旧できました。この経験を踏まえ、この大企業では取引先と一緒に防災教育・訓練を実施しました。

そのとき、例えば真冬に大地震が起きたら暖房をどうするか。電気は完全にとまるのでファンヒーターではなくて、昔ながらの石油ストーブが必要だということで、ストーブを買いました。不幸なことにこの会社は火災を起しました。し

かし、このときの防災訓練がその後の対応に非常に役立ったということです。その後、この会社は防災訓練を毎回見直し実施しています。つまり従前の準備や訓練が大事です。はじめてやるときには不足する部分もあるでしょう。しかし、足りなければ次にやればいいのです。まずはやってみることが大切です。そのキッカケとなるのがこの「ぼうさい探検隊」だと思います。

■ 子どもの姿を見て、大人も変わる

【渥美】 今日のお話では、「ぼうさい探検隊」等で、子どもたちが楽しみながら、みずから学んでいる点が強調されましたが、もう一つ私が強調したいのは、そのような子どもたちの学ぶ姿を見て、私たち大人や先生方も変わっていくことが実は非常に大事だということです。防災教育は、このように二重構造になっているわけです。

そして、今日お話に出たような防災教育活動は、まだまだ広がる可能性があります。それを今後の課題という形で表現したいと思います。

まず第1に、このような手法は防災だけに限ら

ず、環境や福祉の分野にも応用できます。逆に環境や福祉で今回のような手法が使われると、それが防災に跳ね返ってきて、より多くの人を防災教育に巻き込むことができます。そのためにも環境や福祉の活動との連携も考えてみるべきでしょう。



第2に、マップコンクールの審査をさせていただきましたが、これも今後は障害者、外国人等々にも展開できるでしょう。いわゆる災害時要援護者に関する議論はよくされますが、「ぼうさい探検隊」では、これからの課題かもしれせん。

第3は、お話にも出てきましたが、上級生が下級生に教えるというように、異学年や異世代で交流する点をもっと強調すればいいかと思います。というのは、多様な人たちが出会うことで、防災マップもより深いものになるからです。

第4番目は、防災マップは作成して終わりではなくて、その利用が大事です。各学校で学習の一環として防災マップをつくったら、今度は、それに書いてあることを外部の人に知ってもらうイベントを考えるなど、マップの利用に向けた取り組みも必要です。

第5に、スタッフの養成も、今後、取り組むべき課題です。

第6に、評価の問題です。例えば今日のようなイベントを、何人来たかで評価することが多いですが、もう少し幅広く、長期的な評価も考えてみるべきかと思います。例えば、今後も防災イベントを続けて、どれぐらい参加してくれるかが大切ではないかと思います。

第7に、今はどちらかというと予防的な対策を主に考えていますが、実は復興という事後的なものにも、いずれ関わっていくだろうと思います。地域の復興の速さは、別に道路をつくるとか、そういうことではなくて、我がまちや村への愛着が

どれくらいあるかで左右されることが大きいと思います。防災目的で始まった「ぼうさい探検隊」ですが、自分のまちを歩き回り、いろいろ見て知っていくことで、まちを愛する心というか、要は「このまち、好きやねん」という気持ちを持つことにも役立つわけです。

最後に、今日、いろいろと出た話は、いわば防災教育活動のマニュアルです。マニュアルだから、このとおりやったらいいという側面と、逆に、このとりにやったらいけないという側面もあることを忘れていただきたい。防災教育は、そのときのクラスの状況に合わせて、いろいろ変化させてやらなければいけません。同じように「ぼうさい探検隊」も形にとらわれる必要もないのだと、最後に指摘したいと思います。新聞・テレビ等で流れる被災地の情報をただ見るだけでなく、被災者の心情等をおもひやり、自分たちは、それに対してどんな思いで対応すればいいのか。つまり想像力を働かせて考え行動することが、「ぼうさい探検隊」等を気持ちのこもったプログラムにしていくのだと思います。今の「ぼうさい探検隊」等の防災教育マニュアルを、どこまで自分たち風にアレンジできるか。これが勝負だろうと思います。

■ 現場とのコミュニケーションを大切にしたい

【荒木】 今日、ここに集まりの皆さんは、防災について問題意識を持っている方ばかりです。この問題意識をどうやって行動に結びつけるか。国として、それをどう応援していくか。その施策の1つとして情報提供があると思い、国民運動の基本方針の中にも正しい防災知識の提供ということが入ってくると思います。

「基本方針」というと何か無味乾燥に感じますが、要は標準プログラムとして何をするかです。特に防災のように社会と密に関わる施策の場合、皆さんが現場で、どのように情報を受けとめ、活用するかによって、その基本方針あるいは標準プログラムの生死が決まります。そのためにも、

これもお話に出てきましたが、実際に社会全体の知恵を集めて国民運動を進めていくに当たっては、現場の皆さまの意見を取り入れながら、これからの施策を考えていきたいと思います。

■ まとめ

【藤吉】 最後にコーディネーターとして、今日のお話をまとめてみます。

今日はたくさんのキーワードが出てきましたが、その中でも、「子どもたちが、自分が育ち、生活している地域に愛着を持って見る目を育てることが、自分たちの命や社会を守る目を育てていくことにもつながるのではないか」という趣旨のご発言が私の心に強く残りました。また、「情報を一方的に与えるだけではなく、相互の情報交換を行い、意識を高め合うべき」というご指摘は、防災ゲームや防災マップづくりを共同して行うことに通じるのかなと思いました。そして、「とにかく一回やってみることが大事だと、そして一度やったら、それを続けることがもっと大事だと」、そのとおりです。

日本にはすばらしい言葉があります。それは「文化」です。お話に出ましたように、防災、防災と言わなくても、きちんと防災ができているという「文化」をつくっていかなければいけないと思いながら、パネリストの方々の話を聞いていました。

パネリストの皆様、ありがとうございました。会場の皆さん最後までご清聴ありがとうございました。

2

4

5

6

8

第3部

22

23

24

25



朝日新聞東京本社編集局長 武内 健二

本日は、示唆に富んだ貴重なご意見をいただきまして、ほんとうにありがとうございました。

今、時代のキーワードの1つに「安全」があります。逆に言えば、「安全」がキーワードになるほど、世の中の安全が脅かされているわけです。例えば米国産牛肉の輸入禁止の問題では食の安全が、ライブドア事件では投資の安全が、また少し前に頻発した幼児誘拐や殺人事件では一番大切な子どもの命の安全が、それぞれ損なわれてしまったのです。

しかし、今日のテーマである「ぼうさい探検隊」は違います。逆に安全を広め、高めていく試みです。会場に来て、お子さんの顔をじかに見ていたら、何だかホッとしました。この社会も悪くないなど。特に彼らがつくった防災マップを見てい

ると、これをつくるとき、子どもたちはほんとうに楽しそうに、ワイワイガヤガヤしながらつくったのだなという雰囲気が伝わってきました。またパネルディスカッションでも、自分たちのまちを知る楽しみを知って、まちへの愛着心が生まれるというお話を聞いて、防災を抜きにしても、「ぼうさい探検隊」はすばらしい活動だと改めて感じました。

この種のイベントは継続と拡大をしなければいけないと思います。今年より来年、来年よりも再来年、防災マップコンクールへの参加者が増え、中身が濃くなり、運動が広がることを期待するとともに、引き続き主催者皆様の活躍を朝日新聞としても応援していくつもりです。

本日はどうもありがとうございました。



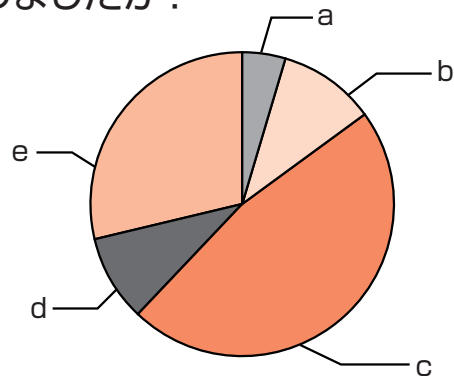
◎参加人数:302 ◎アンケート回収数:84枚 ◎回収率:27.8%
 ◎回答者所属 教育関係者 13.1% 消防・警察関係者 14.3%
 学 生 10.7% 行政関係者 3.6%
 損保関係者 8.3% その他(自治会等) 50.0%

Q1

今回のフォーラムを何でお知りになりましたか?

(複数回答)

- a.当協会のホームページ……………4名
- b.チラシ……………9名
- c.知人の紹介……………41名
- d.新聞・雑誌……………8名
- e.その他……………25名
(内閣府のつどい、防災関係のメーリングリスト等)

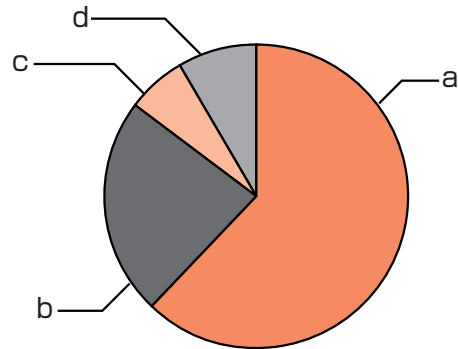


Q2

今回のフォーラムに参加された動機(理由)をお聞かせください。

(複数回答)

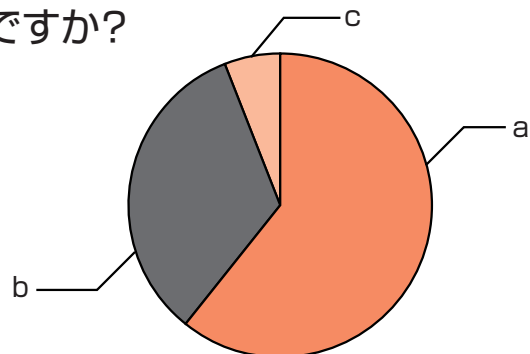
- a.防災教育に興味があった……………59名
- b.テーマに興味があった……………22名
- c.出席者に興味があった……………6名
- d.その他……………8名
(自分も防災教育に取り組んでいる、知人の紹介 等)



Q3

今回のフォーラムの感想はいかがですか?

- a.大変興味深かった……………51名
- b.期待どおりであった……………28名
- c.やや期待はずれであった…………… 5名
- d.期待はずれであった…………… 0名



a, bの主な理由

- ・「ぼうさい探検隊」の取り組みが大変よく分かった。
- ・子どもたちの表現力、観察力に感心させられた。
- ・「ぼうさい探検隊」は損保業界の行事として大変有意義だと感じた。さらに推進してほしい。
- ・フォーラム構成のバランスがよく、3部とも内容がとても充実していた。
- ・パネルディスカッションでは、豊富な事例が紹介され、とてもわかりやすかった。
- ・全体を通して映像やパワーポイントが多く盛り込まれ、わかりやすかった。
- ・今後それぞれの地域や小学校で実施する防災教育、防災訓練のヒントが得られた。
- ・地域の安全、安心に向けて防災活動をする上でとても参考になった。
- ・これほど多くの子もたちが全国で「ぼうさい探検隊」をしていることを知り、感動した。
- ・子どもたちの具体的な取り組み事例を見ることができた。 等

c, dの主な理由

- ・当日の「ぼうさい探検隊」が実施されなくて残念だった。
- ・防災教育が主となり、もう少し地域の防災取り組みについて教えてほしかった。

| |
|---------|
| 2 |
| 4 |
| 5 |
| 6 |
| 8 |
| 11 |
| 閉会挨拶 |
| アンケート結果 |
| 24 |
| 25 |

日本損害保険協会の安全・防災事業の主な10項目

— 安全・安心な社会をめざして —

「台風」「豪雨」「地震」「噴火」…わが国に暮らす以上、避けられないリスクがあります。また、技術の進歩、人口構造や経済活動の変化等によって、新たなリスクが生じたり、巨大化・複雑化しているリスクもあります。

こうした中、日本損害保険協会では、災害や事故から国民の生活を守り、安全で安心な社会をめざして、様々な活動を行っています。

■ 地域の防災力を高めるために

- 1 小学生向け防災教育プログラム「ぼうさい探検隊」の普及
- 2 損保協会認定「奥さま防災博士」の活動支援
- 3 地域防災リーダー養成講座の実施
- 4 損保協会各支部での防災活動
- 5 消防自動車等の寄贈

■ 台風・豪雨災害から生活を守るために

- 6 洪水ハザードマップの作成・普及の推進
- 7 ホームページによる防災情報の発信

■ 事故や災害を知って、備えてもらうために

- 8 防災シンポジウム等の開催
- 9 防火標語の募集・防火ポスターの制作
- 10 総合安全防災誌「予防時報」の発行

小学生向け実践的防災教育プログラム 「ぼうさい探検隊」とは

■ 趣旨

小学生向け実践的防災教育プログラム「ぼうさい探検隊」とは、人と人とのつながりを大切にする気持ちを育むとともに、まちへの関心を高めることを通じて、子どもたちに防災意識が芽生えることをねらいとしたプログラムです。

このプログラムのキーワードは、「防災とは言わない防災」です。子どもたち自身が、楽しみながらまちを探検していくことを通じて、知らず知らずのうちに、まちが好きになり、まちの安心・安全への関心を高め、ひいては防災意識の芽生えにつながる……そんな願いが、この「ぼうさい探検隊活動」には込められています。

■ 活動の内容

小学生を対象に、グループごとに自分たちが住んでいるまちを探検してもらい「どんな場所が危ないか」「消火器や防火水槽、防災備蓄倉庫がどんな場所に設置されているか」などを実際に見て回り、探検の結果を防災マップにまとめて、ふりかえるという教育プログラムです。

まさに「探検隊」の気分で、楽しみながら知らず知らずのうちに自分のまちの危険とその備えについての知識が身につくというものです。探検の中でまちに住む人たちや消防署、交番でインタビューもして、防災や防犯に関する質問に答えてもらったりなど、地元の人々との世代間交流もして、「きずな」を深めることもこの活動のポイントです。

■ ぼうさい探検隊の手順

① まちなか探検



子どもたちが、グループごとにまちを歩いて防災や防犯に関する様々な施設や設備をチェックします。

② 防災マップの作成



発見した消火器や防火水槽などの位置や写真、気づいたことなどを模造紙上の地図にまとめてオリジナル防災マップを作成します。

③ 発表



グループごとにまちの危険なところや気づいたことなどを発表し合い、あらためて活動を振り返り、防災・防犯意識を高めていきます。

※「ぼうさい探検隊」活動は、プログラム説明のほか、まちなか探検（60～90分程度）、マップ作成（60～90分程度）、マップ発表（60分程度）など約4時間程度（半日）で実施することが可能です。
なお、実施に当っては事前に子どもたちへ防災や防犯についての事前学習を行っておくとより効果的です。

■ ぼうさい探検隊活動を実施して

これまでの活動に参加した学校関係者やボランティアの方々からも、「子どもたちが本当に楽しそうにいきいきと探検していた。貴重な経験をさせてあげることができた」「子どもたちが探検活動を通じて、知らず知らずのうちに人と人とのつながりの大切さに気づいていた」「まちへの愛着を

持つことで防災意識が高まるというねらいどおりの充実した授業となった」「NPOと学校の連携による教育活動の好取組み例になった」など大きな反響が寄せられています。

また各地での「ぼうさい探検隊」活動は、新聞、テレビ等マスコミでも大きく取り上げられています。

損保協会では、全国の小学校、自治会、子ども会等に「ぼうさい探検隊活動」の実施を呼びかけています。
詳しくは当協会のホームページ (<http://sonpo.or.jp>) をご覧ください。

会員会社一覧

| | |
|----------|-----------|
| あいおい損保 | 東京海上日動 |
| 朝日火災 | トーア再保険 |
| 共栄火災 | 日新火災 |
| ジェイアイ | ニッセイ同和損保 |
| スミセイ損保 | 日本興亜損保 |
| セコム損害保険 | 日本地震 |
| セゾン自動車火災 | 日立キャピタル損保 |
| ソニー損保 | 富士火災 |
| 損保ジャパン | 三井住友海上 |
| そんぽ24 | 三井ダイレクト |
| 大同火災 | 明治安田損保 |

(2006年3月現在 50音順)

社団法人 日本損害保険協会

〒101-8335 東京都千代田区神田淡路町2-9

URL <http://www.sonpo.or.jp>

(お問い合わせ先) 生活サービス部 NPO・防災グループ
TEL 03-3255-1294/FAX 03-3255-1236
E-mail npo@sonpo.or.jp

かけがえのない環境と安心を守るために

